



淀屋形金雞新話

前編
五



特別
13
3521
5



13
3521
巻 5



昭和三十年
七月九日
購求



金雞新話卷之五

滝郎趣花街

東武岳亭主人賦編



甘露および毒茶の昔人舌の中ふありと彼徑文ありんを
うけけん爰お井戸屋へ出入の医師 相山古仙の御向つ原滝
あゆんが病と氣のとれた其茶應せばとて治すかの却て高年
お其功を奪は然も宅原大言をもちて衆人の前にて
相山が茶をこころひ庸医らうと諺するよく番頭道八
談話ふて是を皆古仙大い憤懣り彼奴ゆるるを五言を
を然まておの譏るるを思ふお井戸屋の斯る真家なるもの

金雞新話卷之五

媚へつゝひて入ぬ黄金を引出さんと計りて其ごとく五舌をてし
て我得意を奪ひつゝ物うゝ憎き高と母がめひるゝと深
く恨を合むとろふけ頃まで高と母が一女小笹と滝五
郎と婚姻をとり結び遠く井戸屋へおびとる本室小鳥
べたよゝ古仙是をめて増々口をく思ひ万望してこの婚
姻をやぐり高と母小鼻あらせんのをと万般工事をめぐる
る或時滝五郎久々智むの妙見宮へ念誦しその帰る
さ神ざれたの一邊を過るるゆ彼相山古仙小鳥と行遇さ
古仙のかめてよゝ高と母をうゝ万望小笹が婚いんを妨ぐん
と思ひ時を是使侍とおひ滝五郎が傍へちかぐと前

こよう頭をさけて礼をまゝ令即今日の那方へ行ぬひやと
さくけくは滝五郎答ての五舌備々久々智むの廣海
寺へ詣さるゝ先生又何せへ赴きあそやと二舌を
古仙がひやう馬心老のけ一邊の民家小病人ありて見舞小
鳥最早夕なむと小鳥のびぬをを下僕を先へかへ馬心老を
又この神壽の曲論る茶友を訪んと思ひ爰まで未だ候ふ
る令即今け神ざれたの邊りを通るめひるゝ廊の夜櫻を
もよほして飯りめひ何ぞや生平小似あそぬ無風流の
光景ふこそおそくたれと云ふぞ滝五郎又答へて小生産の
てよゝ今日まで神壽の甚柳街のちか入るる更るゝ然り

俗やうん雅やうんまご知侍のぼりの古仙宮て打らひ當
時浪速ふ一とよびて二のり良家井戸屋の今自心滝五の君
詩歌連俳香茶の道琴其書畫のいりるまで何ひとらう
かして他ふの酔の氏神とよをむひるがう今まで巷街の風
景を見玉りぬとの抑奈何る神とぞや然を深へて遊び玉
へといふふの有は唯風景をらめ玉ふ那ぞ憚る夏あらんや
今宵の在て今よう尊歩をめぐらぬ人愚心老脚僕つらまる
らんと侑めらむが流石若冠の滝五郎実めとや思ひらん
然を先生の命ふ従ひ今よう忝りて一奥を催し侍らん宜し
く路開とのと入らうと云々ふぞ古仙心中ふ為課らると喜

恰つ滝五郎が俱の丁稚を百般まらう！偽言てけ死らう先
へ返ら古仙の滝五郎を伴ひて斯てぞ道を急たたるが程ら
神寄の花街ふ到りえらふ彼管中が女岡七百のいぬ人も
物うらとこそ思ひて軒毎ふ花を飾り！全盛の遊女ども個
個粉粧をこらう！死せくをあり居及びつ客人の魂を奪らる
る既ふ其日も黄昏ちかく名々る存君花やうふ道中ら
光景うと奈何るる金心鉄腸の壮士うらともの勿心ち神遊天
外ふ飛さぶら況てや血氣のまご定らざる滝五郎この有ら
お打浮せ心恍惚とて彷徨る時うら向ひの方うら連を
促して練束る一個の美人あり年の頃二十ふのうら足らと見

えつろが面おもての桃花とうかの雨あめをうらと愛敬あいきやうこがひて得えめいとほは夫つま
 るる黒髪くろかみを後のちさる小長こながくさけて未まと此糸このいとの結むすめて結むすび珠たま環たま
 の釵かんざしのく糸いとのうらまき光景あつさぬの画える弥陀やだの後光ごうかうのごとく黒髪くろかみ
 天我賊てんがぞくの衲襦なぢゆ源氏げんじ四阿しあの香かぐの圖ずを錦糸きんしのて繡ゆう敷しの
 玉樓ぎよくろうの秋あきの月つき毛嬌まうせう西子せいしもわたるね女によ安やすこむとを見るみる滝五郎たきごろう心
 懣うれ々々とらうて醉まるるごとく太おやうらる息いきをつだ借かも世よめ斯く
 る美人びじんも有ありぬる吾われ今いま富貴ふきの家いへ小産こさんを千ち々の黄金こがねふ
 換かへぬものも心こころふ欲ほくと思おもへられたり需もとめえざる度ほどもるく何なんんら
 らぬ身みふ有あるる未まど斯くる美人びじんと挑まを双ふたべしとらるるかの

高たか無むが娘むすめづとを適あつひの美人びじんらうと思おもひらうとそ鈍おとまけれ
 万望まんぼうかゝる艶女えんにょと一夜ひとよを偶ともふ恥かたじけなくを死しとも恨うらみはさうふる
 くと心こころの裡うちふぞ思おもひたる古仙こせんの一邊いっぺんふありて滝五郎たきごろうが心中しんちゆう
 を悟さとり我計わがけい策さくるらうと情なさけび滝五郎たきごろうふ向むかひて云いやう即君ちゆうくん
 渠みちを見みぬ人ひと是こゝにこむ當時とうじけいふらふ第一だいいちの全盛ぜんせいサ次木屋じぎやの
 五い口妻ごくさいの君きみと言たまはらう彼君かのきみの心こころぎぬ最もとやさしく手てかた物もの
 読よむ花はなむはび和奇わきを詠えい十種じゆうしゆ香茶かうちやの湯ゆ何なんくむとこむ
 万般ばんぱんの技わざ藝ぎふらう又情またなさけの道みちも最もとこむやうらうわがくそ
 即君ちゆうくん今宵いまよひと夜ひとよかの君きみふ見みえぬの日の物ひのもの語かたごの種しゆふ
 るのめと情なさけめらうのかうと云いはらう原末かんとま滝五郎たきごろう其心そのこころ多おほく有ある

かど忽ち打まゝの唇をひやう吾今こゝろく爰小末まがう彼
玄宗の云々うらん解語の花を手折むて空しく帰る
んも男の心小あゝかゝ寸の疵も二寸の疵も血を見ろ言又
を同く夏る濡ぬ前こそ露をよめ久し今花街小まゝ
不手を空しく願ふ願ふ先生彼吾妻とやうんを
今宵も不徳徳めんと強ち小云々うれぞ古仙咄て打喜
びさゝが小生氷人とうりて今宵鶺鴒のそゝをわく進らせ
みんと夫より古仙前小ちて且かめて相知る揚屋小りて
主人小斯とこのまゝが主人の心得忽ち若き男をさせて
芳が許へ云やうて吾妻を迎へ小遣りう古仙又差回

ては廓小各々る歌妓率頭さんどを呼あつめ々々の揚屋
をちのく酒散をめてまゝび和漢の名置山海の珍味う
づ高くゆりあげて山と重ぬ海と廣けさうも小廣地揚屋
の樓上小足のふと死もあゝうらう

滝五逢吾妻

斯るところ小茂木屋の吾妻雜妓うらを扯列て宵々
して入まう主人内室ら小會釋して荒尔と打笑座小
つれ々も備へ三尊の弥隆の御末迎小こそ御座々れを
拜めよ拜せよと幫同らが罵り騒ぐ然して絃管鼓のさ
死歌ひ舞をどろつゝ智合まらう小浮りうらう滝五郎ハ古

滝五郎
廊中に
吾妻と
見る



なほてやむいふま
花のよめ

あつら

五

磯川
吉備丸

あつら
あつら
あつら



あつら

あつら

仙らと杯をめぐりけけ面白さを見るゆつけ心中小田心
やう吾家よりの遠くもあはぬけ死ふ斯る仙境ありつる古又
と今まで知で置つる寔井の中の蛙小こそ有るをこそ御
心小群ひくろ左右して三更の鐘の音更々として御言はけ
せば古仙まご帯向らふ指揮して揚屋の座敷を立出て花
木が許ふのうろ吾妻が客次小群あつまつ又改まる酒宴小
て牽頭ららぎ透づく敬妓らら手ごとの曲その面白さ比へん小
物あは彼彼王質が石室山浦島が子の竜宮界飯うべは夏
さ人忘れ現夢ふろつて皇ごの御代さくくと詠ふらん陸奥
山の黄金の花を致妓帯向小またちくけは個々是を

のうらつ帰家を告げてぞ立飯る古仙もあはせ相妓の正
堂小のうらけ滝五郎も吾妻が閨房あけ錦の褥の上小
座しつろ吾妻少姿を見る小粉面雪のごく朱唇花の
ごとく蟬始らる両髪は秋蟬の翼宛轉らる雙塚は遠山の
色と白居易が賦うらん夫れ勝る艶色ごと身心湯湯る
思ひろろ吾妻も同じく褥子小登り横さる小座るる
滝五郎を能く見る小色白く眉秀で眼の中涼しく唇下
清く人品骨柄のやかくは彼潘安宗玉もこのふの太何で
勝るらんと思ふたけの光景るる吾妻もつろ思入やう
寔小是の杜士のそ何死の人やらん美鹿の鹿をう浮世

仙らと杯をめぐりけけ面白さを見るゆつけ心中小田心

小女と生どしきを斯る男を夫小のちて生涯を果しむる
 を然りその情しかたきども吾身の今の筆電の鳥行きた長
 き勤の身のしんともの詮術を責て今宵唯一夜を千
 の契りと思ひ大節小つとむべしと心の裡小ありの極め滝五
 郎小向の種々のむり言も一つく小想ひをこめ大袈引るを
 てお臥て雨雲雨の交ひ情をス一雜明小のるまで此二枚も
 睡りふつるは百般寔を尽てけふ小を滝五郎の五齋くがを
 神魂蕩ぐる思ひあて次の日も別を惜そ平天帰るか
 らしと古仙お出出来うて諫めてのやう今日ハ且咬うて又
 の日再度まう玉へと強ち小迫めく竟小引立飯くく

前世縁難断

一とび願ひが人の城を傾け再び願ひが人の国を傾け
 本寸延年が辞るべらうる井戸屋滝五郎の二度吾妻の逢
 したる時の間も志せざり二三日を過て又古仙を伴ひ
 神寄の花街のゆるり吾妻が許ふぞ通ひたる斯とら又四
 五度あ及びて或日又行て例のごとく我故らと呼て打さ
 ぎ三更のころふ我故らを飯せせ国房のゆるり滝五郎吾
 妻小向ひてのやう五戸佛こよひの今や酒を飲んだ餘誰ぞ
 小分付て酒をらよせよとて六のころ五戸のめて最安きこと
 小こてと頓て手を打るくして先見をよびけとと二とらと

先見の心得をせまうか立地の一箇の根の瓶子の酒を
へ五皿ととり添て清らるる盃のふ散をのりて持まゆる清
五郎頓ては杯觴をとり揚て自ら配て一盃をのさやう然
て吾妻小向ひて云やう吾侪徐々のと通ふと今宵わて七
度のおよぶ然るゆ不審なることあり徐他の客次小出の酒を
のさめんと先見らるる話しゆてよく知ぬ唯吾座敷に在る
此二杯も吃のり後奈何と云はれど半盃とも受はれぬ
とありても外の盃小授して捨る然れは是を嫌ふゆと人小
訊ぬと左小あはれど外おての吞とあはれど唯吾まへての
吞ありは奈何する度とも分ちがら然る今宵のあはれとありて

は杯觴を進むはる願くは快く此一盃の酒を過して
吾侪が疑ひを暗させぬと云々は吾妻こゝ入て云やう今
滝君の目かごく笑ふ妻は他の客次小する酒を過し待て
はても滝君の御まへゆての一口も吃べ侍るは是れ深き仔
細のまこと願くは滝君此の酒の免しめひは其余の云々を
何うとも尊慮み従ひたすべしんと迷惑がねに云々のあを
五郎のよく疑ひまごの然るる多ひは増く心ふかふるは假令
此二杯の心の心ゆえ多の支へありとも唯一盃を過しぬは
吾侪を汚むる者ら疑ひ思ひまごのめめての度らるるが吾
侪が家の妻も姓もど能く人小問する人然るもさう唯小疑ひ

あつて五佛も男ど思ひきうては後わつめまゝぐらひは酒の
むとの吐ぬとも疾々返辞をいひつゝ常代り言の
東小五吉妻の大方の小心どのめ打渡さして云々やう然まぢふ
曰の上うらゝ奈何とも難々むが実をいつて告まわつては
べし妾此廓小身を賣てようまご一皇ゆの到くぬとも客
人の数々の日小増う夜おあわく畏負人あゝる身とらうて一日
小の五人八人け身一ツのくぐら届うは虎子く飲る人もあつて或時
た妻をたあうその劍嘩ひ及ぶ人もあつぬ然まぢふ小吉妻各人
るむとけ人をて身と任せ生屋を頼んと思つゝ人の獨りあつ
賢き家貧ううう美面うたの背氣うう藝師あぢが心仕付け

豪家の妻く啞方おて是ぞと思へを妻子あつ有磯の海の
く男浪よせて返一飯しての又よせ来る客人の千々の心の
捜しものはと思ひ入る中おまる日滝君かとまあ初めで
尊顔を拜しまわし見ろ小心も疾々と世の斯まで美
麗き殿御もあはれ有ゆめよと身の空蟬の脱げぬごとく人
の言語も耳お入は疾聞房おりのあへてまのこもあまて
然して臥て相語小お言語小の雅を合さ卿さるるあ
うう万般の藝小丈夫の素姓と久の浪速津小一
井古屋の若君あつ尊き卿方の妻おううと侍女ううと
卿側おあれて給ううを世ゆの嬉しく有べれぬと飛え

五佛も男ど思ひきうては後わつめまゝぐらひは酒の

むとの吐ぬとも疾々返辞をいひつゝ常代り言の

おの思へども行き死長を勤りの身従それとも金づるあか
 麻の昔思ひ道をもせり唯残まゝに流るる身を滝君の
 妾中の侍女の御も一玉のまゝと嗚呼吾むらゝの身さうてを
 表晴てる縁組のうらぎる身の中あゝか今斯落がれて
 浮川竹の流るる淵に沈るる夏何ぞそや益多れ夏を願ひ
 んよう唯滝君の御まを大節ゆゑ不勤むらゝのよも思捨
 をくもたゞ方せまうかく未めみやうゆと神小祈り佛小ねらひ
 滝君の未玉うら死に余の客人の捨ちたて一向走うて知ろぞ
 か唯々君小飽せしと思ふら小御ま入小て酒吞は酒こ
 小吃であらうをも飽るる夏にあまると一平さよも飲ぶらう

け認めて侍ひぬと云さうて撞らう少時涙ふくれ居る滝
 五郎又云やう物教うらぬ吾侪をも然まぞ小思ひ玉の夏
 死とも更お忘れし得せし吾も余の慕へれとが寐ても覺
 ても忘れし子斯まで通ひてまらぞう然の人の尚も心得が
 こたの吾ま入中て酒さ入吞ねが飽るる夏にあまるとの抑奈何
 ろる謂はとぞや吾侪の平生と酒を好めば女おまの男おま
 せ酒吃人を愛はらう然を那ぞや吾ま入中て酒を飲てる
 飽るるこの何木の思ひのぞやと酒のうら思くとも文
 らの更ら厭ひのせし今宵のせち小一盃を過しあへど大不血不
 るとくと酌入てさし出せの五平妻の少時うち考へ然うてま

いなり然ちどお曰ふ上りぬ道分さる侍らん然るが假令
妻が身の中不奈何る夏の出来らるとも言は愛相つら
めら其御返辞ご小坐るふえ来このむ酒小侍侍のくら
もさる侍ひるん疾お返辞をと迫むる小を滝五郎打笑ひ
假令你酒のて鬼女ともるは蛇ともるは斯云くは五郎さ
も男ぞ生屋愛さる尺さぬるう疾々のさみと云はしは吾妻
も漸々打笑て然日の上りうの妻も心安堵う卒その酒給
ちんと彼清々と酌入る大盃をう揚て一息おつと吾乾
て滝五郎へささるを滝五郎打喜怡その身も又一盃を吞
て再度吾妻小とへる日定るの吾妻さる小酒を二盃を飲

平天つけて酌交ぬ斯て杯の敷重る時吾妻手をさ
延して燈火を掻とてらと滝五郎吾妻が顔を見て忽ち
小駭きてやよ吾妻你が顔小小き蜈蚣のう付るぞ少
時目を塞死て居よ吾侪ちひて落さるうと滝五郎手を延
て吾妻が額をさるうんとは吾妻其手を楚と捉へ滝君太
くる駭きめひそ妻がけ額のめへの蜈蚣小のあぬるう是十口
死病の命さる跡小て酒をのむ時ハ立地この若く赤くうて
然るが蜈蚣の形ち小見さる此故不御ま入小て酒を天は
け浅探さる額の赤を目あは極めて愛敬つたをてけ後絶
て来ぬいと夫の心小懸うつと今日まで酒を飲さるう

け認め侍るつと云々は滝五郎ちりめて疑の時嘆然
とて又云やう斯る仔細のあかしの吾小節とて大受小思
ひ今まで酒を言さうの理ゆて実小哀とらう吾侪今
まで君らの女を刃々小伶がごとく美しく三十二相揃の者
を又外小有とくと朝暮不めて居るを思ひたや斯の
怪の底ありとの今まで実不知さうぞ然も情をたきを
しう抑奈何と然怪我のしとどと問答は吾妻うち
涙ぐもて唇て云やう委しく語り侍らん小泪のこみ侍る
とど今の何事も打明して残りさう言さう妻が幼稚とれた
淀の一邊小住さう父の名は松倉文吾といひてまらう小家

も富御士のどく他の中道分尊まはる者さうが同御小
八幡の中将君の山屋形ありと土地の人よびて淀屋形とま
ん号侍る其淀屋形小中将と御妾腹の若君玉若
君とまらう住あふ妻が母君妾をいひて日毎淀屋形小あて
御接嬢を窺ひが他玉若君と妻との仲合あて睦まらう
戯れあそぶ中將君見あひてけ子等二人斯まで小其中
の睦れの前つ世の因縁さう然もけ子二人を結号はは
置て成人のち女まらう官人小取上と仰あて
玉若君と妻と御不盡を把交させあひさう斯て其後日
毎中よう遊び合が成日玉若と小刀をめて遊び玉ひ

時奈何と何いめらうせさせめひらんあ過ちてまが額をはごく切玉
 へり妻のをとと泣出し絶入むらう小侍ひを母の抱きて家小
 帰くさるぐ医療を加へつら小二月をうらう小して漸々小病を
 全く愈えれども妻が運の拙たり彼中將君さしらう御惱
 えらう重き病ひ小めめひ竟小黄泉小赴死め入まえようと
 後の繼母君玉若とのを思こめひ何死うえましとは町人小義子
 小やうめひた然を妻が父母の玉らう君の御行志を口二管一ら
 小さぶらうと畢小知ばて止めひた是ホの妻の幼推と死
 小さぶらう妻しら知さぶらう唯母君の寤物語小せさせめひ一
 端へもと覺えずまで小侍さう額の症の符記は通ら小

て侍らうと一五十を語りくらば滝五郎ハは物語りをまり
 妻と母小嘆息し總身汗と流くらと膝をまくりて謂て曰く
 寔小縁あらば千里も相逢縁さらば合縁十日逢ぐらうと
 古人の詞今你が物がらう中將がの落嵐玉若とのひらん則
 ち吾侪が妻と吾侪が母ハ吾を産て立地小死去乳母小の心を
 して淀屋形小あらうらう中父君山明はさせ玉ひくらば繼母
 小給りらう昔の身の尊さ小の似もつらうと當らう小於て中
 將とのあも尚勝らう吾侪淀の屋形小在し時の信小七と等
 小の心を覺えるまで今你が物語りを聞かうけ熟まと

考へ見し夢のどく小骨をある屋形の近死不とうう一人
の女奇廉るる女の児を抱えて日毎小まう吾侪其女の児
と中よく遊び戯れ一日小のりめて女の児が顔ざる小を
つけし小其女の児が泣出さるを見て吾侪も又泣出して乳母
小抱うのて打罵さうさ其後さういふ途たさういふ童のとらたの
夏も止ば理の多く忘れ果て今日の今までも夢ゆも思ひ出
さうさ一你が今の話う小て幽小それよと思ふのこまさん若足小の
覚えぬさう然るも止ば你へら妻小て顔の底も吾侪が迎
ちて付さうさ止ば如何をさう見苦しとて那ぞ又見捨ばや
官を心と勞めめさうと云々止の吾妻は是亦とせし母小旦おこ

ろ宛旦喜怡ひさほろ太息つた嬉し涙小吳居さうさ漸
ら小顔をあげ借の滝君の玉若ささ小て脚座さう然る
を一点あさ何とぞ君小飽せぬやうゆと神仏をのりし小
思ひ宛や今日をわさむも名乗まのせさうさ夫小逢ぬさう
父君さうの引合せさ余りの夏小嬉しとて胸のを遠く侍り
ぬと云さしそは泣小さう滝五郎又云さう你まて何れさ
むけ花街小身ま賣て斯る勤めさあみぞ最のべさうと云
々止ば吾妻の向ははさうと是小つたての種々の悲さう話
の侍さうさ妻父君のさう御心ゆさうさうん淀の家居を
引拂のて浪花小一箇の古家を需多得て詩書の其金を

浪花小一箇の古家を需多得て詩書の其金を

費^{つひ}り^つる^ふ普^み詰^{しん}嚴^{おご}重^{そら}小^{せう}徑^{じやう}管^{くわん}て^て主^{しゅ}管^{くわん}丁^{てい}推^{おし}主^{しゅ}妻^{さい}く^く抱^{かか}へ^か頭^{あたま}て
 彼^か死^しふ^ふり^り住^{すま}松^{まつ}倉^{くら}文^{ぶん}吾^ごと^とあ^あく^くて^て吾^あ妻^{さい}屋^や東^{とう}作^{さく}と^と
 名^なく^く活^{かつ}業^{ぎやう}と^とあ^あり^りの^のひ^ひひ^ひ一^{いつ}夜^や黄^{わう}金^{きん}を^をつ^つへ^へる^る真^ま藏^{ざう}と
 ち^ちま^まち^ち地^ち中^{ちゆう}小^{せう}山^{さん}明^{めい}お^おち^ち一^{いつ}箇^{かん}の^の古^こ井^{せい}と^とあ^あり^りる^るを^を是^{ぜい}を^を引^ひ揚^{やう}
 ん^んと^とて^て妻^{さい}の^の人^{にん}夫^{ふう}を^を損^{そん}ひ^ひ其^{その}後^ご左^さ木^{ぼく}が^が三^{さん}万^{まん}兩^{りやう}の^の黄^{わう}金^{きん}を^を
 失^{しつ}ひ^ひの^の又^{また}盜^{とう}賊^{ざく}の^のこ^こも^も小^{せう}有^{ゆう}と^とあ^ある^る黄^{わう}白^{はく}財^{さい}宝^{ぼう}の^のこ^こう^う多^たく^く奪^{だつ}ひ^ひ去^{きょ}
 父^{ちち}の^の東^{とう}作^{さく}の^の余^よ五^ご平^{へい}が^が手^て小^{せう}殺^{ころ}さ^され^れあ^あり^りの^の主^{しゅ}管^{くわん}奴^に子^し婢^{べい}女^{にょ}ら
 も^も皆^{みな}ち^ちう^うり^りる^る小^{せう}里^りへ^へ帰^{かへ}り^り大^{だい}の^のあ^あり^りる^る家^か小^{せう}母^ぼと^と妻^{さい}と^と二^に人^{にん}も^も住^{すま}居^い
 ぐ^ぐく^く家^かを^を賣^うん^んと^とま^まれ^れど^ども^も古^こ井^{せい}の^の怪^{あや}し^しと^と有^ある^る買^かひ^ひ人^{にん}も^もあ^あり^り
 竟^{つひ}ぬ^ぬり^り家^かを^をも^も打^{うち}捨^{すて}て^て神^{かみ}さ^さの^の下^かり^り小^{せう}住^{すま}母^ぼの^の病^{びやう}の^の茶^{ちや}末^{まつ}の^の代^{だい}

小^{せう}は^は次^じ未^み屋^やへ^へ身^みを^を賣^うい^いる^る哀^あれ^れと^と思^{おも}ひ^ひて^てこ^この^のあ^あり^りと^と一^{いつ}言^{ごん}
 も^も残^{のこ}り^りの^の語^ごり^りの^の滝^{たき}五^ご郎^{らう}は^は是^{ぜい}を^を皆^{みな}て^て駭^{おど}然^{ぜん}と^とて^て驚^{おど}死^しに^に仕^しら^られ^れ
 此^{この}言^{ごん}發^{はつ}さ^さる^る夏^か半^{はん}時^じを^をあ^あり^り熟^{じやく}々^々心^{こころ}中^{ちゆう}小^{せう}男^{おとこ}も^もや^やう^う傍^{はた}ら^らぬ^ぬ
 吾^あ妻^{さい}屋^や東^{とう}作^{さく}ハ^ハこ^この^の結^{むす}号^{ごう}の^の妻^{さい}の^の父^{ちち}も^も一^{いつ}を^を彼^か人^{にん}傳^{でん}命^{めい}
 や^やく^く百^{ひやく}般^{ぱん}の^の災^{さい}疫^{えき}小^{せう}の^の竟^{つひ}ぬ^ぬ一^{いつ}家^か絶^{たつ}る^る小^{せう}の^の彼^かを^を古^こ
 井^{せい}の^の怪^{あや}し^しの^のあ^あり^りて^て家^かを^を七^{しち}一^{いつ}吾^ご家^かの^の其^{その}古^こ井^{せい}の^の怪^{あや}し^しを^を種^{むす}ぐ^ぐ
 若^わ子^しの^の黄^{わう}金^{きん}を^をそ^そう^う天^{てん}の^のと^とあ^あり^り死^しと^との^の云^いふ^ふ言^{ごん}ハ^ハ吾^あ妻^{さい}
 屋^やが^が家^かの^の財^{さい}宝^{ぼう}を^を奪^{だつ}ひ^ひ取^とり^りも^も同^{どう}く^く夏^か半^{はん}時^じ然^{ぜん}を^をと^とて^て今^{いま}吾^あ
 妻^{さい}小^{せう}斯^する^る夏^か半^{はん}時^じを^を告^あ知^ちさ^さん^んの^の善^{ぜん}し^しの^のあ^あり^り唯^{ただ}一^{いつ}刻^{こく}も^もあ^あり^り吾^あ
 妻^{さい}を^を請^こ出^{しゅ}し^し吾^ご本^{ほん}室^{しつ}と^と爲^なす^す小^{せう}の^のあ^あり^りと^と思^{おも}ひ^ひの^の女^{にょ}時^じあ^あり^りて

岳亭大人画作

淀屋形金雞新話

前 五冊
後 五冊

天保四年己孟春

江戸小傳馬町三丁目

丁子屋平兵衛

司南傳馬町三丁目

中村屋幸藏

京三條富小路

近江屋治助

大阪心齋橋南久太郎町

秋田屋市五郎

書賈

